慶びの花々

慶びの花々

会期／二〇一九年五月三日（金・祝）～六月三十日（日）
前期　五月三日（金・祝）～五月二十六日（日）
後期　六月一日（土）～六月三十日（日）

宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3 ――ごあいさつ
4 ――宮廷文化を彩った花々―そして近代へ
7 ――図版
46 ――花の名品選―三の丸尚蔵館収蔵品より―
49 ――作品解説
54 ――出品目録
56 ――List of Exhibits
58 ――Foreword

凡例

一、本図録は、二〇一九年五月三日（金・祝）から六月三十日（日）を会期とする展覧会「慶びの花々」の解説図録である。

一、本図録に掲載する図版の作品番号は、展示番号と一致する。

一、会期中、展示替を行う。

一、本図録中に掲載した作品寸法の単位はcmである。特に記載のない限りは、縦（奥行）×横（幅）×高さの順で表示した。絵画は本紙の寸法である。

一、本展覧会で展示する作品は、当庁用度課所管の作品番号13を除き、すべて三の丸尚蔵館の所蔵品である。

一、本展覧会は、当館学芸室研究員斉藤全人が企画し、同学芸室が協力して構成した。また本図録4～6頁の概説を斉藤が担当した。作品の解説は、作品番号1～7、16、17、19を斉藤、8～15を主任研究官岡本隆志、18を主任研究官五味聖が担当した。

一、本図録掲載の図版は、当館が保管するフィルムおよびデジタル画像による。このうち、デジタル画像については福島省、佐野順一（株式会社インフォマージュ）が撮影した。

ごあいさつ

豊かな自然に恵まれた日本では、華麗に咲き誇る花々の彩りや、その華麗さの奥にある強い生命力、そして四季の移ろいと共に散りゆくはかなさなど、花の持つ様々な表情を楽しむことができます。古くより人々は、喜びや哀しみ、恋しさなど一言では言い表せない繊細な心情を花に託して和歌を詠み、また衣装や身の回りの調度にも様々な花をあしらってきました。こうして、時代と共に表現様式を変えながらも、花をモチーフとする優れた作品が数え切れないほど生み出されてきたのです。花々が、どれ程、人々の感情を豊かにし、文化を育んできたことか。花は我々の美意識の形成に大きな役割を果したと言えるでしょう。

宮中でも、古くから花に関わる様々な行事がありました。季節を祝う節句にはその折々の花が飾られたほか、花を持ち寄って和歌を詠み合う花合（はなあわせ）とよばれる遊びが行われ、立花が発展するなど、宮中における花の文化は、次第に民間にも広く浸透していきました。そして近代、宮殿内の壁面や天井を、様々な技法によって表わされた花々が飾り、また皇室御慶事の際には、東京の街中を造り物の花々で飾られた花電車が走りました。皇室文化においても、花は最も重要な意匠の一つです。

本展覧会は主に当館所蔵の作品の中から、皇室御慶事の折に献上された、または宮殿などの室内装飾のために制作された、花を意匠とする作品を集めました。慶びの場を飾るこれらの作品の卓越した装飾性や造形美を楽しんでいただければ幸いです。

二〇一九年五月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第83回　慶びの花々）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	正五九花卉図	柳沢淇園	三幅対	江戸時代（18世紀）	p. 8-9
2	花卉図		一幅	江戸時代（18～19世紀）	p. 10
3	春花生花図	狩野玉円	一幅	江戸時代（19世紀）	p. 11
4	牡丹図衝立	大庭学僊	一基	明治20年頃（1887頃）	p. 12
5	花籠図衝立	大庭学僊	一基	明治20年頃（1887頃）	p. 12
6	紫陽花草花図衝立		一基	明治20年頃（1887頃）	p. 13
7	百合牡丹薔薇図衝立		一基	明治20年頃（1887頃）	p. 13
8	薩摩焼色絵黄蜀葵牡丹図花瓶		一点	明治初期（19世紀）	p. 14
9	薩摩焼色絵菊花図花瓶		一対	明治初期（19世紀）	p. 15
10	色絵草花図花瓶	幹山伝七	一対	明治初期（19世紀）	p. 16-17
11	色絵四季草花図食器	幹山伝七	五九四点のうち	明治初期（19世紀）	p. 18-22
12	七宝藍地花鳥図花瓶	七宝会社	一対	明治22年（1889）	p.24-25
13	色絵四季花卉図花瓶	精磁会社	一点	明治23年（1890）	p.23
14	七宝向日葵蟷螂図花瓶	安藤七宝店	一点	明治30～40年代	p. 26
15	七宝桜図花瓶	濤川惣助	一対	明治43年（1910）	p. 27
16	紅白梅図屏風	今中素友	六曲一双	大正12年（1923）	p. 28-31
17	国之華	池上秀畝	六曲一双	大正13年（1924）	p. 32-41
18	綴錦牡丹図屏風	川島織物	四曲一隻	大正14年（1925）	p. 42-43
19	罌粟	土田麦僊	対幅	昭和4年（1929）	p. 44-45

宮廷文化を彩った花々―そして近代へ

はじめに

毎年、春と秋の二回、各界で活躍している人々や各国大使夫妻などを招き、赤坂御苑において盛大に行われる園遊会。この園遊会が、もともと「観菊会」と「観桜会」という催しから始まったものであることはあまり知られていない。

観菊会は、明治十三年（一八八〇）に赤坂仮皇居において行われたのを端緒とし、その翌年には、観桜会が吹上御苑において初めて開かれた。これらの観菊会、観桜会には皇族や大臣、各国大使・公使らが招かれ、天皇皇后が菊や桜を愛でながら招待者たちに御会釈されるという、まさにいまの園遊会に通じる催しであった。

この観菊会、観桜会は、欧化政策を推進する外務卿井上馨が、イギリス王室を中心に西欧諸国で広く行われていたガーデンパーティーにならって開催を提案したものであったが（註1）、そもそも西欧のガーデンパーティーは王宮を会場として王室と招待者が交流を図る社交の意味合いが強く、そこでは花の存在は特別クローズアップされない。花を愛でる観菊会、観桜会という形式にいたった理由は、皇室の外交姿勢だけでなくその伝統性を各国に披露する必要を鑑み、古くから宮廷で行われてきた花宴（はなのえん）の文化を踏襲しようとしたためであった（註2）。

ではここで、宮中における花の文化という観点から、宮廷の中で花がどのように扱われてきたのかいくつか事例を挙げながら見ていこう。

年中行事の中の花

次頁挿図1の「中元御燈籠之図」は、明治二十年（一八八七）に完成した画帖《公事録附図（恒例公事之図）》（当館蔵）の中に含まれる一図である。江戸時代後期の宮廷の年中行事や臨時儀式を後世に記録として残すために、岩倉具視の発議により十年の歳月をかけて制作されたのが《公事録》である。それに附属する附図は、狩野派系の絵師の樋口守保が筆をとった。

この「中元御燈籠之図」に示されるように、中元、つまり旧暦七月十五日の盂蘭盆会においては、宮中では延臣から数多くの燈籠が献上される行事が行われた。この時、燈籠は故事を示す人形や、詩歌を表わす造花によって飾り立てられた。この燈籠の飾りは、命婦（みょうぶ）（従五位下以上の位階の女性）以下からの献上は花籠にする決まりがあり、また延臣たちの間では近衛家は紅梅、二條家は桜を用いる、といった具合に各家で飾る花が決まっていた（註3）。

この他にも宮中では季節の折々に節会（せちえ）といって、五位または六位以上の諸臣が宮廷の天皇のもとに集まって宴が催された。今では、桃の節句や端午の節句として我々の日常に根付いている季節の節句は、宮中で行われた各季節の節会、つまり年中行事が民間に広まったものである。節会の多くは、中国から伝わった儀式がもとになっていたが、日本古来の伝統や風習と混ざり合って、独自の儀式に発展していった。そしてこれらの節会では、四季折々の花が祝い慶びの意を示すために、その場に飾られたのである。

例えば、毎年五月五日に行われた「五日（いつか）の節会」では、延臣たちが鬘（かずら）に菖蒲を挿し、天皇に菖蒲を献上した。そして天皇からは薬玉（くすだま）が下賜され、その後に騎射や宴が行われるという流れであった。この薬玉とは、香料を錦の袋に入れ造花で飾り、さらに菖蒲やヨモギをあしらって五色の糸を垂らした華やかなもので、各貴族の屋敷では母屋の柱などに飾られた。

また九月九日には、長寿を願って菊花酒を飲む「重陽（ちょうよう）の節会」が行われた。この日の前日には花瓶に入れた菊の花に天皇が綿を被せ、一晩を置いて花の香りの移った綿で体をぬぐう着綿（きせわた）と言う風習があった。その際には、御常御殿の欄干に色とりどりの菊の花が結わえつけられたといい、見た目にも美しい行事であったことは想像に難くない。

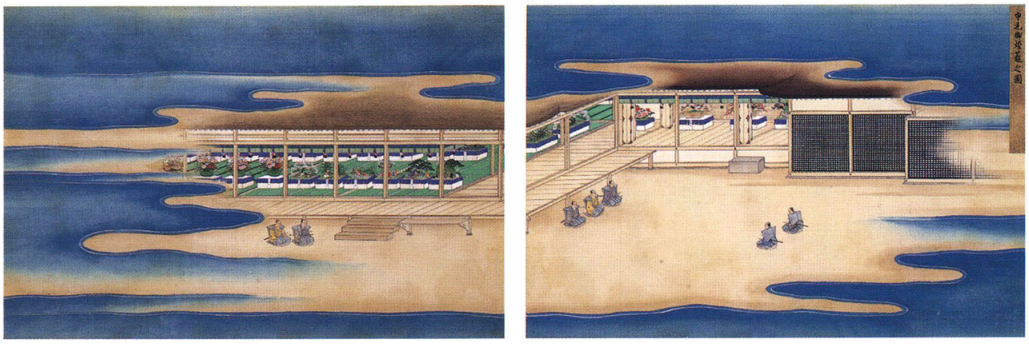
こうした節会以外でも、七月七日には公家の中でも最高位である五摂家のひとつ近衛家から、宮廷に花扇を献上するという年中行事があった。近衛家の下女が花使という役を務め、お供が大きな花扇を抱え、さらに下男が傘を花扇に差し掛けながら参内するのが決まりであった。この花扇は、尾花、女

郎花、桔梗、仙翁、小車、菊、蓮を扇の形に束ねた非常に豪華な花束であり、献上された花扇は御常御殿の鴨居にさかさまに掛けられた。

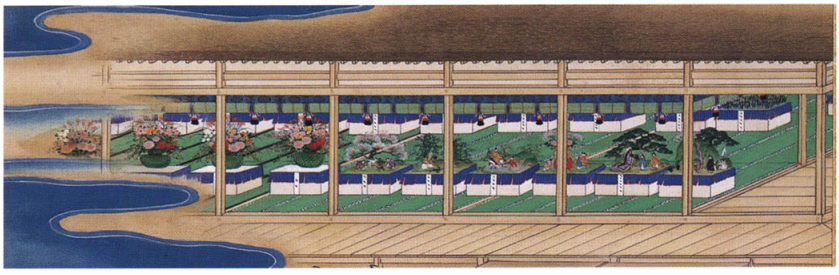
このように、宮廷は折々の行事のたびに花で飾り立てられていたのである。

花の宴

そして節会を含む年中行事の他にも、宮中では花を愛でる宴が折に触れて行われていた。いまの四月頃にあたる旧暦の二月には、歌舞音曲を楽しみながら桜の花を愛でる「花宴（はなのえん）」が宮廷で催された（註4）。その起源は古く、平安時代初期に編纂された勅撰史書『日本後紀』の中には、弘仁三年（八一二）二月に嵯峨天皇が内裏近くの庭園である神泉苑に行幸され、桜の花をご覧になった。その後に文人に詩を作らせ、綿を賜った。これが花宴の始まりである、という記述が認められる。



挿図1 「中元御燈籠之図」《公事録附図（恒例公事之図）》樋口守保筆（当館蔵）



この花宴は天皇が私的に行う催しであり、『源氏物語』第八帖「花宴」でもその様子が語られている。物語中では、二月の二十日過ぎに紫宸殿で催された桜の宴において、天皇のもとに、皇太子、中宮、親王や公卿らが参上し、桜を愛でながら天皇から賜った韻字をもとに詩文を作っている。光源氏もこの時に詩を作り、舞を披露している。

また同じく王朝文学の古典である『伊勢物語』では「花の賀」という段がある。次頁挿図2の《伊勢物語花の賀》（当館蔵）はその場面を絵画化したもので、作者は土佐派の絵師在原古玩である。描かれているのは、東宮（貞明親王、のちの陽成天皇）の母親である二条后高子の長寿の祝いとして催された宴の様子である。賀と呼ばれる長寿祝いは、四十歳以降、十年ごとに開かれる慣わしがあり、特に桜の咲く季節に行われる賀は、花の賀と呼ばれた。

絵を見ると、庭には満開の桜、その花びらが遣り水にも散り落ち風情を感じさせる。邸内では二条后の前に桜を挿した花器が飾られ、縁側では手折ったばかりの桜の枝を翁から童女が受け取っている。桜を手に捧げ持ち、入室しようとする男たちの姿もうかがえる。このように宮廷を中心に平安の頃から貴族の間では、花を愛でる宴席が頻繁に開かれていたのである。

花の宴は、まさに今のお花見に通じる催しであり、このような花を愛でる長い伝統が、冒頭で触れた園遊会の前身となった観桜会、観菊会の催しへとつながっていったのである。

花の遊び

さらに宮中における花の文化という点に着目すると、平安貴族が楽しんでいた花合わせ・花競べのような雅な遊びも注目される。これは左右に分かれた人が、桜などの花を出し合ってその美しさを競い、それと同時にその花にちなんだ和歌を披露して優劣を競う遊びであった。

平安時代末期の公家・平信範（たいらのぶのり）の日記である《平兵部記》（当庁書陵部蔵）を見ると、十四巻ある中の第一巻、平治元年（一一五九）十月八日の条では、女房たちが菊集に興じている様子が記されている。この菊集とは、菊合わせ、つまり花合わせの一種であり、左右に分かれて菊の花を出し合い、その美しさの優劣を競うものだった。平安の頃より中級貴族の間にこうした花を用いた遊びが広まっていたことが分かる。

宮中における立花（りっか）

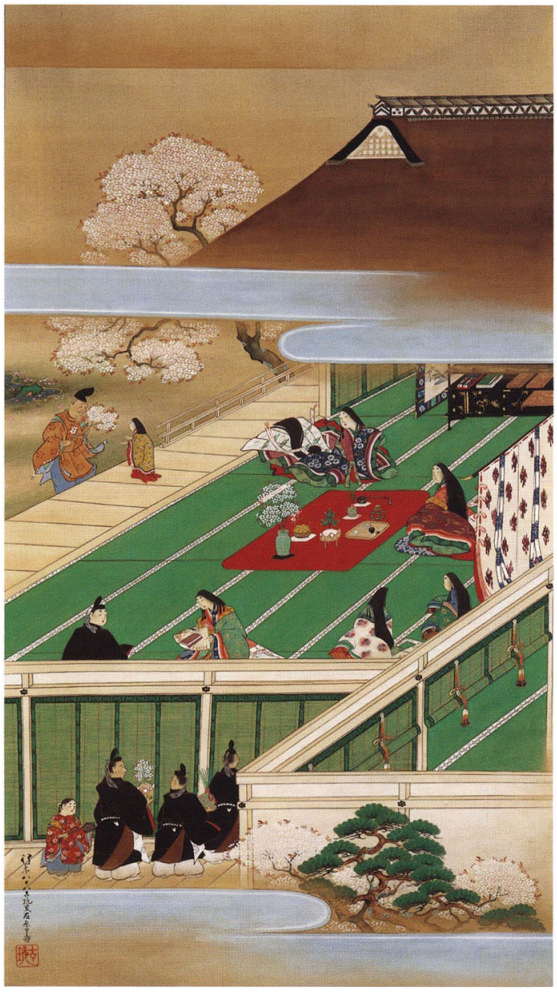
平安から時代を経て、室町時代になるといけ花の原型である立花という様式が生まれる。さらにこの立花の文化は、江戸時代になると急速に発展する。これは後水尾天皇が、立花を大成したことで知られる池坊専好（二代）を召して指導を受けられるほどに、非常に立花を愛していたことが大いに関係する。後水尾天皇は、親王や延臣らを集めて立花を行う会をしばしば催し、また譲位して上皇となってからも僧侶や町人までも参加させる大規模な宮中立花会を開催した。

江戸時代中頃に書道、茶道、有職故実などの諸芸に秀でた文化人として知られた、近衛家当主家熙は、『槐記』（家熙の口述を侍医の山科道安が筆記した日記）の中で次のように語っている。

後水尾院は立花に於ては甚だ堪能ある御事なり。禁中の大立華と云事は此御代にこそありけれ。主上を始め奉り、諸卿諸家共此事に堪能ある人を撰ばれて、紫宸殿より庭上南門まで双方に仮屋をうちて、出家町人に限らず其事に秀たる者に皆立華させて並べられたり。秀吉の大茶湯後の一壮観なり。

享保十三年（一七二八）二月四日条

この文章からも、後水尾院のもとで開かれた立花会の盛大な様がうかがえる。こうした民間までも含めた大規模な立花会が、立花の普及に一役買ったと言えよう。



挿図2《伊勢物語花の賀》在原古玩筆（当館蔵）

おわりに

以上見てきた通り、年中行事における花、今の花見に通じる花宴や花の賀、花をもちいた雅な遊び、宮中で発展した立花など、花は古くから宮廷文化と切っても切れない関係にあった。

そうした伝統を経て、時代が明治に移ってからも花は皇室の文化に欠かせないものとなった。園遊会に通じる観菊会、観桜会といった催しの他にも、本展出品作をご覧いただければわかるように、明治宮殿や離宮などを飾った美術品の数々は華やかな花をモチーフとしており、また御慶事の奉祝品として献上された品々にも皇室にふさわしいと人々がイメージした花々がモチーフとして用いられている。

花を愛で、花に思いを託す、という古来からの伝統が土壌となって、近代において、まさに花開いた皇室ゆかりの花の美術品。その華やかさや造形の美しさ、種類の豊富さをぜひ本展で味わっていただきたい。

（斉藤全人／当館学芸室研究員）

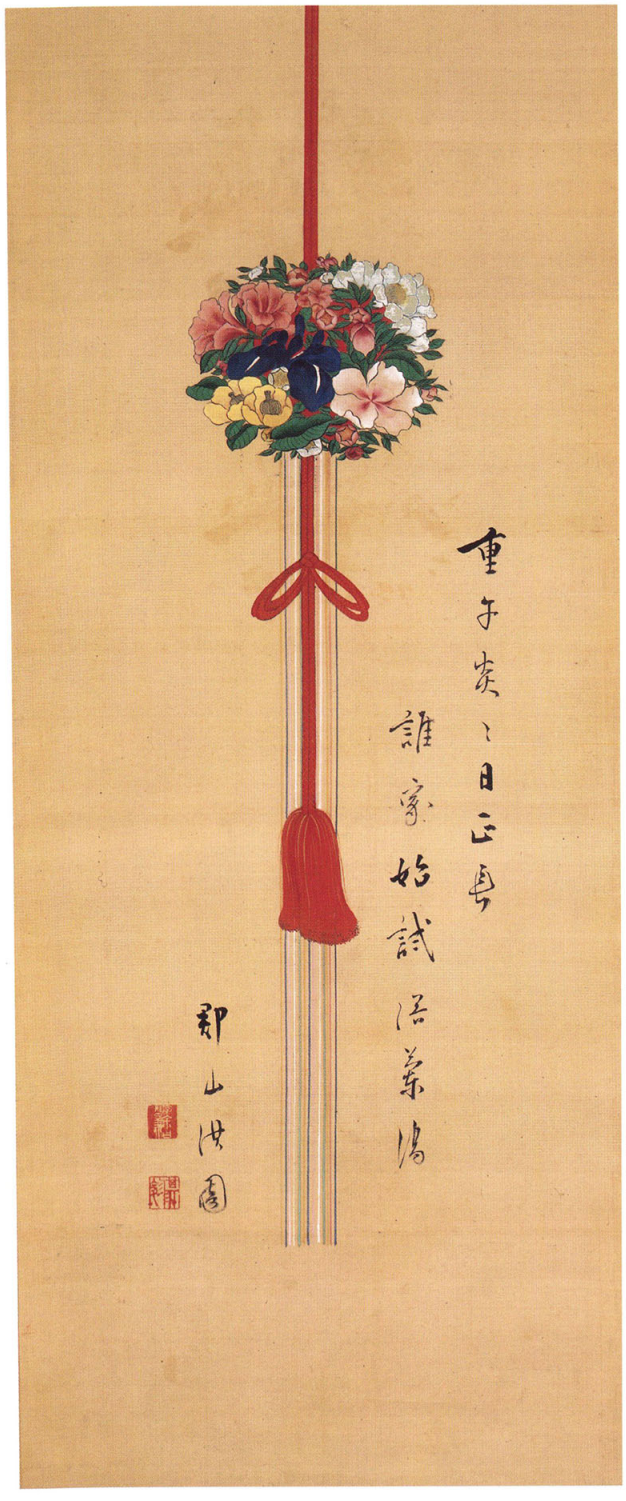
（註1）「当時条約改正に其の力を尽せる参議兼外務卿井上馨、欧州各国の帝室が常に社交界の中心たるが如く、我が皇室に於ける外交の盛大ならんことを希ふ、乃ち春秋二季御苑に於て観桜・観菊の両園遊会を行ひ、以て外国外交官を招請し、又三大節日に各国公使等を参列せしめられんことを建言す」『明治天皇紀第五』吉川弘文館、昭和四十六年

（註2）『事典観桜会・観菊会全史　戦前の〈園遊会〉』川上寿代、吉川弘文館、平成二十九年

（註3）『東京国立博物館コレクション『旧儀式図画帖』にみる宮廷の年中行事』東京国立博物館、平成三十年

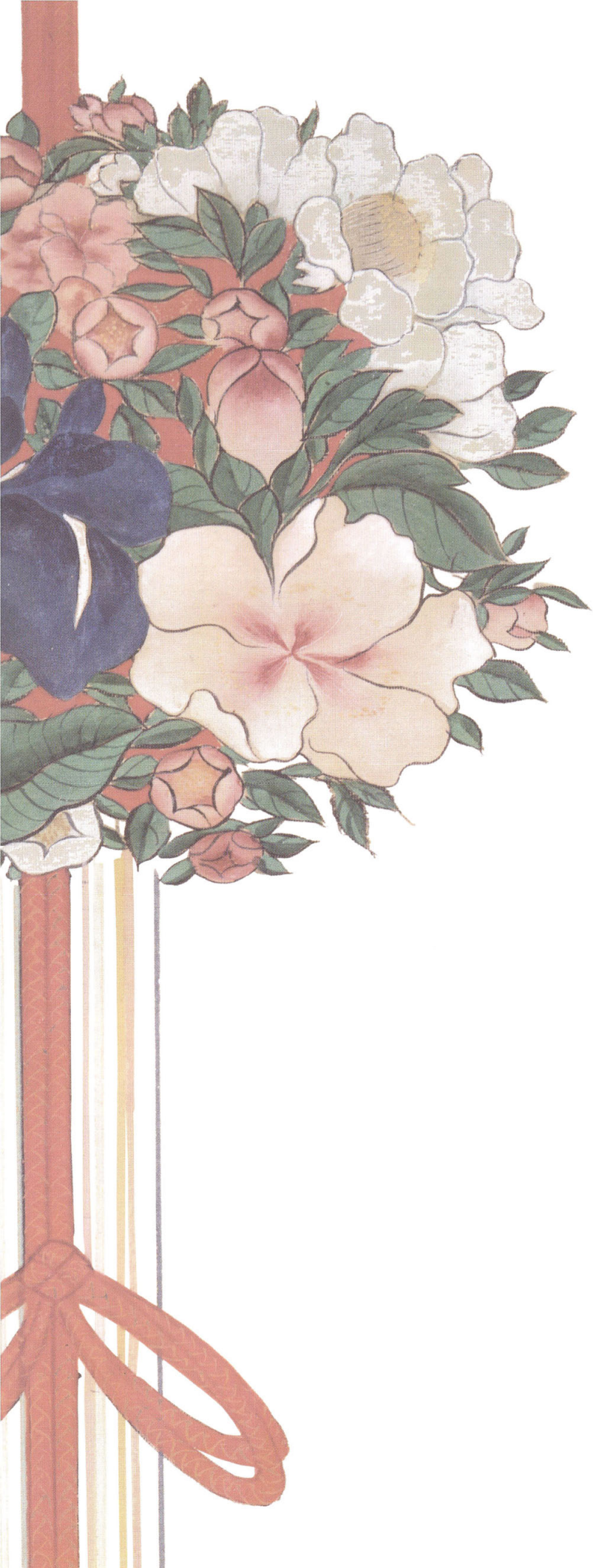
（註4）『花―世の中に絶えて桜のなかりせば―』展覧会図録、斎宮歴史博物館、平成十二年

图版



1　正五九花卉図　柳沢淇園　三幅対

江戸時代（十八世紀）　絹本着色　各九八・九×四〇・八



九月九日望鄉臺他鄉
佳節還客杯人情已厭
南中苦鴻雁那從北地
來
洪國臺作

2

花卉図　一幅

江戸時代（十八～十九世紀）

絹本着色

一四六・五×八二・五

3 春花生花図　狩野玉円

江戸時代（十九世紀）

絹本着色

一二三・五×五五・〇

一幅

4　牡丹図衝立　大庭学僊　一基
明治二十年（一八八七）頃
紙本金地着色
八四・二×八三・八

5　花籠図衝立　大庭学僊　一基
明治二十年（一八八七）頃
紙本金地着色
八六・二×八三・三

6 紫陽花草花図衝立 一基
明治二十年(一八八七)頃
紙本金地着色
八五・七×八九・三

7 百合牡丹薔薇図衝立 一基
明治二十年(一八八七)頃
紙本金地着色
七七・七×八九・五

8　薩摩焼色絵黄蜀葵牡丹図花瓶　一点

明治初期

陶磁

径二二・五、高五六・八

裏面

9　薩摩焼色絵菊花図花瓶　一対

明治初期

陶磁

各径一九・四、高五二・五

10

色絵草花図花瓶　幹山伝七

明治前期

陶磁

各径二五・三、高五一・五

一対

大きい方から順に焼物皿、菓子皿、膾皿、漬物皿

焼物皿

11 色絵四季草花図食器　幹山伝七

明治前期

陶磁

寸法は解説(51頁)内に記載

五九四点の内

菓子皿

膾皿

漬物皿

鉢(大)側面合成写真

鉢(大)の見込み
(真上から覗いた様子)

鉢(大)

［参考］色絵四季草花図食器 全12種

13

色絵四季花卉図花瓶　精磁会社　一点

明治二十三年（一八九〇）

陶磁

径四〇・〇、高七六・三

裏面

12 七宝藍地花鳥図花瓶　七宝会社

明治二十二年(一八八九)

七宝

各径四五・〇、高七九・〇

一対

14

七宝向日葵蟷螂図花瓶　安藤七宝店　一点

明治三十～四十年代（二十世紀）

七宝

径一一・八、高二四・五

15

七宝桜図花瓶　濤川惣助　一対

明治四十三年（一九一〇）

七宝

各径一四・七、高三三・七

16

紅白梅図屏風　今中素友

大正十二年（一九二三）

絹本金地着色

各二一九・〇×四五二・二

六曲一双

17

国之華

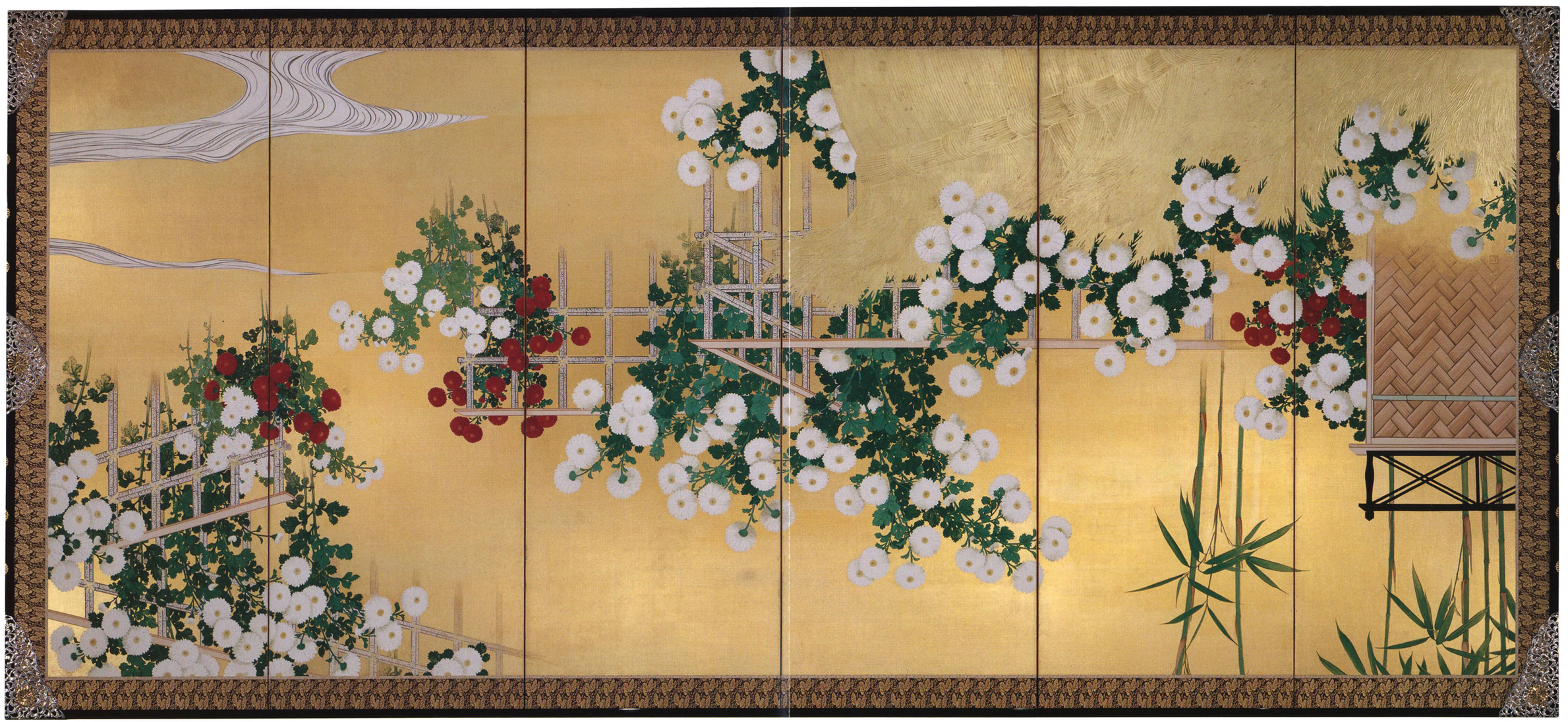
池上秀畝

六曲一双

大正十三年（一九二四）

紙本金地着色

各一八六・六×四三四・八



18

綴錦牡丹図屏風　川島織物

四曲一隻

大正十四年（一九二五）　綴錦

総一八五・〇×二七二・〇

19
罌粟　土田麦僊　対幅
昭和四年（一九二九）　絹本着色　各一六一・〇×一〇六・二

花の名品選―三の丸尚蔵館収蔵品より―

本展出品作以外にも、三の丸尚蔵館には花を描いた絵画や、花を意匠とした工芸の作品が数多くある。その中から厳選した名品をここで紹介したい。

参考①　牡丹図
伝趙昌　中国・元時代（14 世紀）
百花の王、牡丹の堂々たる姿を描いた優品。こうした中国・宋元時代の草花図は、室町時代以降の日本絵画に大きな影響を与えた。

参考②　四季草花図屏風
伝狩野永徳　安土桃山時代（16 世紀）
もとは八条宮家の御殿を飾っていた襖絵。気分が大きく壮麗な画風はまさに永徳一派の特徴。

参考④　牡丹小禽図（「動植綵絵」）
伊藤若冲　明和２年（1765）以前
大輪の牡丹が画面を埋め尽くす、若冲の装飾性が存分に発揮された作品。

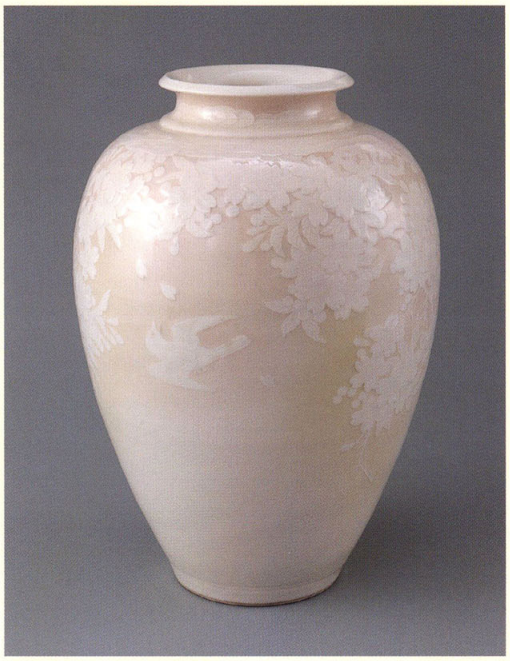
四月　牡丹に蝶図

一月　梅椿に鶯図

九月　菊に小禽図

六月　立葵紫陽花に蜻蛉図

参考③　花鳥十二ヶ月図
酒井抱一　文政６年（1823）
抱一は琳派で繰り返し描かれてきた装飾的な草花図、花鳥画の中に、俳諧に通じる軽やかさや洒脱さを取り入れて新たな境地を切り開いた。



参考⑥　旭彩山桜図花瓶
三代清風與平　明治 38 年（1905）
山桜のレリーフを薄桃色の釉薬の上に表現した気品の高い花瓶。

参考⑤　色絵金彩菊貼付香炉
十二代沈壽官　明治 26 年（1893）
明治宮殿の装飾用調度として用いられた独創的な造形の香炉。

参考⑧　菊花
横山大観　昭和 3 年（1928）
大観の皇室への尊崇の念が込められた写実的な菊図。

参考⑦　春庭秋圃
小室翠雲　大正 8 年（1919）
中国・明清の画家の影響を受けて描かれた濃密かつ華麗な花鳥図。

作品解説

1　正五九花卉図　柳沢淇園

三幅対　江戸時代（十八世紀）
絹本着色　各九八・九×四〇・八

江戸時代に幕府は、人日（旧暦の正月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、重陽（九月九日）を式日（儀式を執り行う日）として制定し、これを五節句と称した。本図は、その五節句の中で人日、端午、重陽、三つの節句にちなんだ三幅対である。季節の花を花器と取り合わせ、画面上部に漢詩をよせる。元来、人日の節句では人々は無病息災を祈って七草粥を食べ、端午の節句では邪気を払うために、魔除けの薬草である菖蒲や蓬などを束ねた薬玉を軒先に挿した。そして重陽の節句では、菊の花の香りを移した真綿で体を拭う着綿や、菊酒を飲んで邪気を払う風習があった。三幅対のうち、右幅は人日の節句を表わし、青磁鉢に植えた白梅と福寿草を描いている。福寿草は元日草とも呼ばれ、新春を祝う花として正月に飾られた。端午の節句にちなんだ中幅は、菖蒲を躑躅、椿とともに束ね、朱房と五色の糸を垂らした華やかな薬玉を描く。そして重陽の節句を示す左幅は、あえて菊は描かずに、朱色の編籠に蘭の花や石榴、梨の実を取り合わせている。

作者の柳沢淇園（一七〇四～五八）は、人の師となるのに十分なだけの芸を十六も備えていると讃えられるほどに、絵画、漢詩、書、儒学、篆刻、医学など様々な文化に精通していた文人である。本図の趣向をこらした画題にも淇園の深い文化的素養がうかがえる。

2　花卉図

一幅　江戸時代（十八～十九世紀）
絹本着色　一四六・五×八二・五

十八世紀以降の日本では「百花図」と呼ばれる草花図が数多く制作された。これは、非常に豊富な種類の草花を一つの画面に描き込んだもので、本草学の発展や植物図譜の出版などにも見られる博物学的な関心の高まり、そして市井における園芸趣味の広がりなどが根底にあり、また長崎から伝わった沈南蘋などの清の画家による濃彩かつ緻密描写な花鳥図の影響もうかがえる。四季の草花を取り混ぜるという意味では、美しさを追求したある種の理想画とも言えるだろう。

本図もこの「百花図」の系譜に連なるもので、瓢箪を下げた竹籠からは、まさに無数の花があふれ出し、その勢いのまま画面の上へ下へと広がっていく。非常に写実的に描かれた花々は、その増殖するかのような繁茂ぶりと合わせて、見る者を圧倒するエネルギーを放っている。牡丹、百合、杜若、黄蜀葵、桜、菊といった草花図のモチーフとしてなじみ深い花だけでなく、ツルレイシ（蔓荔枝）やワレモコウ（吾亦紅）など江戸時代前半までの草花図では描かれなかった花が描かれている。また桜ひとつをとっても、ソメイヨシノや八重桜など複数種の描き分けが認められる。溢れんばかりの花々を生けた竹籠の横に置かれた鳳凰型の瓶には、凛と縦に伸びる蘭が生けられ、静と動の効果的な対比構図となっている。

3　春花生花図　狩野玉円

一幅　江戸時代（十九世紀）
絹本着色　一二三・五×五五・〇

江戸時代後半には様々な花を籠や花器に飾った様子を描く「花籠図」という画題が流行した。本図はその「花籠図」の展開例として興味深い作品。画面手前の中国趣味の銅製花瓶は、釣り花瓶の形状でありながらあえて床置きされ、青と白の藤の花が生けられている。その奥には朱塗りの台に乗った竹籠の中に、大ぶりの牡丹と山吹、そして桜が生けられている。またこうした立派な花器に盛られた鑑賞用の花とは別に、蒲公英、スミレ、スギナ、ツクシといった春の野草が傍らにそっと置かれている。手折られたばかりのような野草の描写は、中国の折枝画の影響を感じさせる。描かれているのは、いずれも四月から六月頃にかけて花を咲かせる春の植物であり、その明るい色彩や穏やかな画風とも相まって、画面には春の温かく柔らかな空気が漂っている。

狩野玉円永信（一八一六～八〇）は、狩野休伯長信を祖とする下谷御徒士町狩野家の絵師。父の狩野休白満信より絵を学んだ。

4　牡丹図衝立　大庭学僊

一基　明治二十年（一八八七）頃
紙本金地着色　八四・二×八三・八

5　花籠図衝立　大庭学僊

一基　明治二十年（一八八七）頃
紙本金地着色　八六・二×八三・三

6　紫陽花草花図衝立

一基　明治二十年（一八八七）頃
紙本金地着色　八五・七×八九・三

7　百合牡丹薔薇図衝立

一基　明治二十年（一八八七）頃
紙本金地着色　七七・七×八九・五

霞ヶ関離宮において暖炉前に設置するために用いられていた衝立。霞ヶ関離宮は、明治十七年（一八八四）に有栖川宮邸として竣工し、同三十七年に離宮となった。本衝立はおそらく竣工間もない頃に装飾用の調度としてあつらえられたものと考えられる。

《花籠図衝立》は、近世から流行した花籠図の形式を受け継いだものである。立花の文化の発展や、博物学の流行などの影響もあり、十八世紀以降の日本では、色とりどりの花を花籠や花器に生けた様子や、あるいは釣花籠に生けて中空に浮かぶ様子を描いた花籠図が人気を博した。また《紫陽花草花図衝立》および《百合牡丹薔薇図衝立》は、折枝画というジャンルに連なるものである。折枝画とは、草花や花木の全体を大きく描く全株の花卉画に対し、草花の一部を比較的小画面に描く中国絵画の形式を指す。幹から折り取られたかのような状態の枝や茎を描くことからこのように呼ばれる。明治宮殿や離宮はこうした華やかな草花図によって飾り立てられていたのである。

《牡丹図衝立》と《花籠図衝立》は、捺されている印章から大庭学僊（一八二〇～九九）の作であることが判明する。学僊は現在の山口県周防の出身で、京都に出て小田海僊に学んだ。維新後は東京に拠点を移し、明治宮殿の杉戸揮毫にも参加するなど宮内省の御用もつとめた。他の衝立もその描写技術を見る限り、学僊もしくは明治期に活躍した日本画家によるものであることは間違いない。

8　薩摩焼色絵黄蜀葵牡丹図花瓶

一点　明治初期
陶磁　径二二・五、高五六・八

9　薩摩焼色絵菊花図花瓶

一対　明治初期
陶磁　各径一九・四、高五二・五

薩摩焼は慶長三年（一五九八）に朝鮮半島から渡来した陶工がもたらした技術をもとに、薩摩藩領内で作られてきた。十八世紀中頃までに白い陶胎素地に上絵付けをほどこす錦手と呼ばれる技法が確立し、金彩と色絵による華やかな薩摩錦手が海外の博覧会で好評を博して、十九世紀中頃から後半にかけて盛んに輸出された。幕末から明治初期にかけて作られた輸出向けの薩摩錦手は日本国内に残る現存作例が少なく、幕末から明治初期にかけて外国賓客の迎賓施設であった延遼館や、和風建築でありながら西洋的な大空間をもった明治宮殿の装飾品として用いられた作例などがわずかに確認されるのみである。作品番号8、9はいずれも明治初期に制作されたと推測される薩摩錦手による瓶子形の大型花瓶で、獅噛不遊環耳を伴う器形、口縁周辺と裾付近の文様帯と胴部に縦長に描かれた草花図からなる文様構成に共通性がみられる。裾から胴にかけてやや膨らみ、首へと上がるにしたがって細くなる花瓶の形状に合わせて、鮮やかな緑と赤を主に用いて、葉の一部や花弁に金彩を用いた黄蜀葵や菊が描かれている。薩摩錦手で描かれる花としては、菊や牡丹、木香薔薇などが多く、作品番号8にみられる黄蜀葵は珍しい図様である。

10　色絵草花図花瓶　幹山伝七

一対　明治前期
陶磁　各径二五・三、高五一・五

幹山伝七（一八二一～九〇）は京都で初めて磁器製造を専業とした陶工として知られる。瀬戸で生まれ、彦根藩のお抱え陶工として湖東焼で技術を磨いた後、幕末に京都へと移った。明治初年代には清水に大規模な工場を構え、京都でいち早く本格的な洋食器を製作するなど国内外に販路を広げたが、不況の影響を受けて晩年は製陶活動を縮小したため長らく忘れられた存在であった。本作品は細密な色絵で花鳥を描いた一対の花瓶で、ほぼ同じ図様をそれぞれの花瓶に左右反転させて絵付けを行っている。端反りの口縁部から獅噛不遊環耳のつく首部にかけてすぼまり、胴部をやや膨らませた器形で、首部には金彩で古銅器風の文様を緻密に描く。白磁の胴部にはカワセミやルリビタキ、スズメ、メジロが飛び交い、そこに梅や燕子花、百合、撫子、菊など色とりどりの四季の花々が咲き乱れ、金彩の点描で霞をあらわし、華やかな空間を出現させている。京都らしい円山四条派の影響を受けた繊細な描写や、洋食器製作で培われた西洋的な洗練、中国の清朝陶磁にみられる粉彩に似た濃密な色絵と、明治前期の時代に特有の和洋中の要素が混在した魅力がある作品である。

11　色絵四季草花図食器　幹山伝七

五九四点の内　明治前期

陶磁

有栖川宮家旧蔵品で旧高松宮家に引き継がれた、色絵磁器による和食器のセット。口縁部を金彩と緑と赤の上絵による七宝繋文様で縁取り、その内面に四季の草花を写実的に描く。この食器セットは、鉢、汁碗、吸物碗、飯椀、煮物碗、煎茶碗、茶台（茶托）、焼物皿、膾皿、漬物皿、菓子皿、徳利の十二種の器で構成され、そのうち鉢は大中小のサイズの異なる三種類、徳利は大小の二種類がある。現存点数にはそれぞればらつきがあるが、多いものでは六十点を超えているため、当初は六十客以上の揃いであった可能性も考えられる。これだけの贅を尽くした食器であるから、おそらく宴席で用いられて人々に口福だけでなく、眼福をももたらしたはずである。

四種類の皿はいずれもほぼ正円形で、用途によって径が異なる（焼物皿：径一八・九、膾皿：径一四・〇、菓子皿：径一二・五、漬物皿：径八・五㎝）。描かれたのは製作当時わが国で見ることのできた植物と推測されるが、同じ図様を繰り返し描くわけではなく、たとえ同じ植物であっても器種の違いによって描き方に変化を加えている。この食器類のなかで一番豪華な器である鉢（最大径三四・〇㎝）は、大中小のいずれも外面だけでなく内面にも草花図が描かれており、はたして何を盛ったものか、食卓の華として注目を集めたことであろう。

12　七宝藍地花鳥図花瓶　七宝会社

一対　明治二十二年（一八八九）

七宝　各径四五・〇、高七九・〇

藍地を背景にして、芙蓉、百合、牡丹、藤、水仙、桜、山吹、野茨、石楠花、躑躅、蒲公英、山梔子、都忘れなど、初夏の花々を中心とした草花図が有線七宝によって写実的に表わされている。花々のあいだにはオオルリやジョウビタキなどの野鳥がみられ、裏面では水辺の風景のなかに水鳥が表わされている。上部や下部の文様帯は典型的な有線七宝の技法であるが、胴部の大ぶりな花鳥図は花や葉の色彩が同じ植線内で濃淡があり、無線七宝風の表現となっている。芙蓉の葉を緑系の色ではなく墨絵のように黒や灰色の釉薬を用いている点や、石楠花の幹の陰影表現なども特徴的で、絵画的な七宝表現に対する意識をうかがうことができる。

この花瓶を製作した七宝会社は名古屋を本拠地として明治四年（一八七一）に設立したが、同十三年に新設された東京工場はのちに帝室技芸員となる濤川惣助に譲渡されており、上記のような特徴のある無線七宝風の表現がみられる本作品の製作にも濤川が関与したものとみられる。博覧会出品作と同様の大型花瓶であるが、明治二十二年に竣工した明治宮殿のなかで、最も贅をこらした空間であった千種の間を飾る調度として製作された。

13　色絵四季花卉図花瓶　精磁会社

一点　明治二十三年（一八九〇）

陶磁　径四〇・〇、高七六・三

御紋を貼り付けた首部や台座を埋め尽くした濃密な色絵とは対照的に、胴部の周囲には日本画のような淡い色彩で、葉鶏頭、紫陽花、萩、菊、露草と、枇杷、柿、花梨の果実が写実性豊かに描かれた花瓶。宮内省の購入時期や大型の花瓶であることから、前年に新築された明治宮殿の調度として製作されたものとみられる。花瓶本体と台座は別々に作られており、台座も磁器製である。だが、本作の器形と文様構成に類似した図案が、明治八年（一八七五）から十四年にかけて博覧会事務局および大蔵省商務局製品図画掛によって編纂された『温知図録』（東京国立博物館所蔵）に収録されている。図案の方には胴部の花卉図に木蓮や芙蓉、梅が描かれており、本作品と同じ図様ではないが、図案に書き込まれた記載から宮内省向けに一対で製作された可能性も考えられる。ただし、図案の考案時期と宮内省の購入時期のあいだに時間的なズレが存在することから、花瓶の製作時期を明治二十三年と断定するかどうかは再度検討の余地があるかもしれない。

精磁会社は香蘭社を設立したメンバーが独立して、明治十二年（一八七九）に有田で設立された。フランスのリモージュから最新式の製陶機械を導入するなど本格的な磁器製造を目指し、明治前期の国産洋食器のトップランナーとして宮内省への食器納入や、輸出向けにもすぐれた製品を残した。輸出の不振や不況のあおりを受けて活動期間は短かったが、海外からの里帰り作品の紹介などを通

じて近年再評価の声が高まってきている。

14　七宝向日葵蟷螂図花瓶　安藤七宝店

一点　明治三十～四十年代（二十世紀）
七宝　径一一・八、高二四・五

夏の風物詩である向日葵と、その後ろから姿をのぞかせるカマキリの図様を有線七宝であらわした花瓶。地色はやや赤味のある灰色の一色のみで、ほかには明治前期のような細かな文様帯はほとどこされていない。七宝だけでなく陶磁などでも明治三十年代以降にみられるようになる、図様のみを大ぶりに配した作品で、向日葵の葉や枝には濃淡様々な緑の釉薬が用いられて写実性を増している。向日葵は正面を向いたものと横向きの二輪で、大きな花弁のなかの筒状花は周縁部を有線で、中心部を黄色と緑色を混ぜ合わせた無線で表現している。

安藤七宝店は明治十三年（一八八〇）に創業、同二十三年に解散した七宝会社を継承し、現在まで続く名古屋における七宝製造の中心的な存在として知られる。本作品は明治四十四年に昭憲皇太后より雍仁親王（のちの秩父宮）が拝領されたとの伝来がある。

15　七宝桜図花瓶　濤川惣助

一対　明治四十三年（一九一〇）
七宝　各径一四・七、高三三・七

薄墨色の背景に桜を配した濤川惣助（一八四七～一九一〇）による無線七宝の作品。口縁部から枝垂れる左方の花瓶と、底面から枝が伸びていく右方の花瓶の取り合わせから、日本画の対幅を想起させる構図に特徴がある。また、左方の花瓶は葉を中心に暗色で、右方の花瓶は葉を緑にするなど明るめの釉薬が用いられており、左右で異なる時間帯の桜の様子を表現しているようにもみえる。その他にも、枝はまるで墨線のような筆触の感覚を再現し、桜の花も有線七宝特有の輪郭線を用いずに白のわずかな濃淡であらわすなど、七宝の技術で絵画表現をかぎりなく追究した濤川らしさがうかがわれる。

濤川惣助は尾張を中心に盛んであったわが国の七宝工のなかでは珍しく、東京を拠点として生涯活動した。明治十年代までは陶磁器の製産にも従事していたが、七宝会社の東京工場を譲り受けて、塚本貝助の協力を得ながら本格的な七宝製作に取り組み、無線七宝を開発した。明治二十九年（一八九六）には京都の並河靖之とともに七宝家として初めて帝室技芸員に任命された。

16　紅白梅図屏風　今中素友

六曲一双　大正十二年（一九二三）
絹本金地着色　各二一九・〇×四五二・二

大正十三年（一九二四）の皇太子（昭和天皇）御結婚を祝うために、福岡市の有志者らが集い、実業家の頭山満を総代として献上された大型屏風。作者は、福岡に生まれ、明治三十八年（一九〇五）に上京して川合玉堂に師事した今中素友（一八八六～一九五九）である。本名は善蔵。別号に知章、草江軒がある。素友は花鳥画を得意とし、明治末から昭和前期にかけて文展や帝展で活躍した。本屏風の制作には福岡の官幣小社である住吉神社が協力し、わざわざ境内に参籠室が新築された。素友は身を清めて、その参籠室にこもり制作にあたったという。

素友は、大正七年（一九一八）の第十二回文展に《梅日和》と題した六曲一双の梅花図屏風を描いている。その表現をさらに発展させたのが本屏風である。屏風右隻の中央に巨大な幹を構える白梅は、苔むした樹皮や四方八方に伸びた枝の様子から樹齢の長さがうかがえる。その背後には、垂直方向に細くしなやかに伸びる枝が若々しい紅梅が描かれる。右隻ではこの紅梅の花が鮮やかに画面を埋め尽くし、対する左隻は右隻からのびてきた枝が白い花弁を咲かせる。梅の幹や枝を大胆に屈曲させながら描く表現は、宋時代以降、中国の文人に好まれた墨梅図にすでにその例が認められる。渡来した中国絵画の影響を受けた雪舟や狩野永徳等によって、梅はさらに大画面障壁画へとアレンジされ、さらに江戸時代には琳派や円山派の画師を中心に、多くの梅花図が屏風に描かれた。本屏風にもこうした桃山障壁画や琳派に学んだ様子がうかがえる。金地に紅白の梅という、まさに慶祝にふさわしい屏風であろう。

17　国之華　池上秀畝

六曲一双　大正十三年（一九二四）
紙本金地着色　各一八六・六×四三四・八

「国之華」という作品名の通り、わが国を代表する花、桜と菊を主題とした屏風である。総金地の画面に、右隻は大樹の山桜を描き、左隻は垣根沿いに連なって咲く紅白の菊を描く。山桜の重厚な存在感と、清らかな水が間を流れる菊の軽妙さ

が見事な対比を見せる。ソメイヨシノとは異なり、花が開くと同時に若葉が出る山桜ならではの、青々とした葉と純白の花弁のコントラストが美しい。

本屏風は、《紅白梅図屏風》（作品番号16）と同様、大正十三年（一九二四）の皇太子（昭和天皇）御結婚奉祝品である。池上秀畝が制作し、男爵藤田平太郎が献上した。池上秀畝（一八七四～一九四四）は長野出身で、父、祖父ともに画家という環境から自然と画家の道を目指すようになり、上京して荒木寛畝に入門した。狩野永徳や山楽などの桃山絵画に傾倒しながら、写実的かつ装飾的な画風を確立して、文展を中心に活躍した。

本屏風の、胡粉を盛り上げて桜や菊を表現する手法や、金地の大画面に安定感をもたらす巨樹を中心に据えた構図などには、秀畝が熱心に学習した桃山絵画の強い影響がうかがえる。華やかな本屏風は、昭和三十四年（一九五九）四月十二日、皇太子（上皇陛下）御結婚後の御内宴の日にその慶びの場に飾られた。

18　綴錦牡丹図屏風　川島織物

四曲一隻　大正十四年（一九二五）

綴錦　総一八五・〇×二七二・〇

本作は綴織の技法によって牡丹の花を織り表した屏風で、金地に白、淡いピンク、紅、紫の四色の大輪の花が咲き揃う。屏風下方に腰板が取り付けられ、黒漆地に蒔絵と螺鈿によって大小の蝶が舞い飛ぶ姿が配されている。屏風裏側には腰板はなく、縹地に花模様を織り表した繻珍が全体に張られている。

牡丹は美しく豪華なその姿から「百花の王」として愛でられ、また「富貴」の象徴として古くより美術工芸品の上に表現されてきた。牡丹に蝶を取り合わせて描くのは、中国の唐代にすでにその原型が見え、蝶は幼虫から蛹となり、さらに羽化することから人の魂が変化した姿、あるいは蝶は夢を喚起させるモチーフであるとも考えられている。また蝶は老人を意味する耋（てつ）に音が通じるため、長寿の意味を持つ。このような吉祥の意味合いのもと、牡丹に蝶が添えられることで、牡丹の華やかさが一層、引き立てられている。

本作の牡丹図の考案は、京都の日本画家、川北霞峰（一八七五～一九四〇）による。その原画と織下絵は川島織物文化館に伝えられている。この原画は四幅の掛幅装で、綴織の部分とほぼ同寸法であり、当初より、四曲一隻の屏風として、各扇の縁木で区切られる部分も考慮しながら、四図が破綻なく連続するように構成して描かれたことがわかる。本作は背景の金地には金糸を、牡丹の花や葉の綴織の部分には、数多くの色糸を工夫して組み合わせることで、原画の色彩を忠実に再現するとともに、さらに鮮やかに織り上げられている。大正十四年（一九二五）の大正天皇御結婚二十五年に際して、京都市より献上された品である。

19　罌粟　土田麦僊

対幅　昭和四年（一九二九）

絹本着色　各一六一・〇×一〇六・二

竹内栖鳳の門下として修行した土田麦僊（一八八七～一九三六）は、写生を重要視していた師栖鳳の姿勢を受け継ぎ、常に入念な写生を繰り返して作品制作に臨んだことで知られる。本図の制作にあたっても、麦僊はわざわざ全国各地をめぐって理想的な罌粟を探し、また自宅の庭にも罌粟を植えたという。そして本図の草案として何枚も何枚も罌粟のスケッチを描いたことがわかっている。

膨大な写生を経て、下書きに取りかかり、そこで幾重にも線を引き重ねながら、最終的にモチーフの本質をとらえる一本の線にたどりつく、というのが麦僊の作画方法であった。それにより画面には張り詰めた緊張感と静まりかえった美しさが生まれるのである。徹底して余計なものがそぎ落とされた本図は、まさに近代の草花図の完成形と言っても過言ではない。

麦僊は、大正七年（一九一八）に小野竹喬らと新しい日本画の創造を目指して国画創作協会を結成し、同志達とのヨーロッパ遊学を挟んで精力的に展覧会（国展）を開催した。しかし財政上の理由から運営が困難となって昭和三年（一九二八）に解散し、その翌年から帝展へ復帰している。本図はその復帰第一作目となる意欲作で、「凡庸な花鳥画中で光彩を放ってゐるもの、随一」など高い評価を受け、さらに宮内省の買上となることで麦僊の帝展復帰を飾った。

出品目録

会期／二〇一九年五月三日（金・祝）～六月三十日（日）　前期　五月三日（金・祝）～五月二十六日（日）
後期　六月一日（土）～六月三十日（日）

作品番号	作品名	作者名	員数	制作年代	材質技法	寸法	展示期間
1	正五九花卉図	柳沢淇園	三幅対	江戸時代（十八世紀）	絹本着色	各九八・九×四〇・八	後期
2	花卉図		一幅	江戸時代（十八～十九世紀）	絹本着色	一四六・五×八二・五	前期
3	春花生花図	狩野玉円	一幅	江戸時代（十九世紀）	絹本着色	一二三・五×五五・〇	前期
4	牡丹図衝立	大庭学僊	一基	明治二十年（一八八七）頃	紙本金地着色	八四・二×八三・八	前期
5	花籠図衝立	大庭学僊	一基	明治二十年（一八八七）頃	紙本金地着色	八六・二×八三・三	後期
6	紫陽花草花図衝立		一基	明治二十年（一八八七）頃	紙本金地着色	八五・七×八九・三	前期
7	百合牡丹薔薇図衝立		一基	明治二十年（一八八七）頃	紙本金地着色	七七・七×八九・五	後期
8	薩摩焼色絵黄蜀葵牡丹図花瓶		一点	明治初期	陶磁	径二二・五、高五六・八	前期
9	薩摩焼色絵菊花図花瓶		一対	明治初期	陶磁	各径一九・四、高五二・五	前期
10	色絵草花図花瓶	幹山伝七	一対	明治前期	陶磁	各径二五・三、高五一・五	全期間
11	色絵四季草花図食器	幹山伝七	五九四点の内	明治前期	陶磁		全期間
12	七宝藍地花鳥図花瓶	七宝会社	一対	明治二十二年（一八八九）	七宝	各径四五・〇、高七九・〇	全期間
13	色絵四季花卉図花瓶	精磁会社	一点	明治二十三年（一八九〇）	陶磁	径四〇・〇、高七六・三	全期間
14	七宝向日葵蟷螂図花瓶	安藤七宝店	一点	明治三十～四十年代（二十世紀）	七宝	径一一・八、高二四・五	後期
15	七宝桜図花瓶	濤川惣助	一対	明治四十三年（一九一〇）	七宝	各径一四・七、高三三・七	後期
16	紅白梅図屏風	今中素友	六曲一双	大正十二年（一九二三）	絹本金地着色	各二一九・〇×四五二・二	後期
17	国之華	池上秀畝	六曲一双	大正十三年（一九二四）	紙本金地着色	各一八六・六×四三四・八	前期
18	綴錦牡丹図屏風	川島織物	四曲一隻	大正十四年（一九二五）	綴錦	総一八五・〇×二七二・〇	後期
19	罌粟	土田麦僊	対幅	昭和四年（一九二九）	絹本着色	各一六一・〇×一〇六・二	前期

※作品番号13は用度課所管、その他はすべて三の丸尚蔵館所管の作品である。

慶びの花々
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 83

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京印書館
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
二〇一九年三月二十九日発行

©2019, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

慶びの花々

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 83

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京印書館
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
二〇一九年三月二十九日発行

©2019, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

List of Exhibits

1

Flowering Plants of the Seasonal Festivals of the New Year, May and September

Yanagisawa Kien
set of 3 hanging scrolls
Edo period, 18th century
color on silk
each scroll 98.9×40.8

2

Flowers

1 hanging scroll
Edo period, 18th-19th century
color on silk
146.5×82.5

3

Fresh Spring Flowers

Kano Gyokuen
1 hanging scroll
Edo period, 19th century
color on silk
123.5×55.0

4

Screen of Peonies

Oba Gakusen
1 screen
c.1887
color and gold on paper
84.2×83.8

5

Screen of a Flower Basket

Oba Gakusen
1 screen
c.1887
color and gold on paper
86.2×83.3

6

Screen of Hydrangeas and Plants

1 screen
c.1887
color and gold on paper
85.7×89.3

7

Screen of Lilies, Peonies and Roses

1 screen
c.1887
color and gold on paper
77.7×89.5

8

Satsuma Ware Vase with Design of Hibiscuses and Peonies in Polychrome Glaze

1 vase
early Meiji period, 19th century
ceramic
d.22.5, h.56.8

9

Pair of Satsuma Ware Vases with Design of Chrysanthemums in Polychrome Glaze

pair of vases
early Meiji period, 19th century
ceramic
each vase d.19.4, h.52.5

10

Pair of Vases with Design of Flowers and Grasses in Polychrome Glaze

Kanzan Denshichi
pair of vases
1870's to 1880's
ceramic
each vase d.25.3, h.51.5

11

Tableware with Designs of Flowers and Grasses of the Four Seasons in Polychrome Glaze

Kanzan Denshichi
among 594 pieces
1870's to 1880's
ceramic

12

Pair of Cloisonné Vases with Design of Flowers and Birds on Blue Ground

Shippo Company
pair of vases
1889
shippo cloisonné
each vase d.45.0, h.79.0

13

Vase with Design of Flowers of the Four Seasons in Polychrome Glaze

Seiji Company
1 vase
1890
ceramic
d.40.0, h.76.3

14

Cloisonné Vase with Design of Sunflowers and Mantis

Ando Cloisonné Company
1 vase
mid 1900's to mid 1910's
shippo cloisonné
d.11.8, h.24.5

15

Pair of Cloisonné Vases with Design of Cherry Blossoms

Namikawa Sosuke
pair of vases
1910
shippo cloisonné
each vase d.14.7, h.33.7

16

Folding Screen of Red and White Plum Blossoms

Imanaka Soyu
pair of six panel folding screens
1923
color and gold on silk
each screen 219.0×452.2

17

Flowers of the Country

Ikegami Shuho
pair of six panel folding screens
1924
color and gold on paper
each screen 186.6×434.8

18

Folding Screens of Peonies in Figured Brocade

Kawashima Textiles
four panel folding screen
1925
tsuzure-nishiki figured brocade
total size 185.0×272.0

19

Poppies

Tsuchida Bakusen
pair of hanging scrolls
1929
color on silk
each scroll 161.0×106.2

No.13 is from the Supply Division, and the rest of the works are from Sannomaru Shōzōkan.

Foreword

In Japan with its abundant nature, one can enjoy various aspects of flowers, such as the splendid colors of flowers blooming, the strong vitality in the depths of this splendor, or the transiency of petals falling along with the changing of the four seasons. Since ancient times, people composed poems about delicate feelings which are difficult to express in words, such as joy and sorrow, or affection, entrusting them to flowers within these poems. Various flowers were also used in designs to decorate clothing and personal furniture. Thus, innumerable superior works with flower motifs have been created, changing in styles along with the times. Flowers have enriched people's emotions and nurtured culture, playing a significant role in the formation of our aesthetic senses.

Various events connected with flowers have also been held within the Imperial court since ancient times. The culture of enjoying flowers within the Imperial court gradually spread to the public, such as displaying flowers of each season at seasonal festivals, flowers brought to gatherings called '*hana-awase*', which were games of composing poems related to flowers, and the development of Rikka style flower arrangement. Furthermore, in modern times, the walls and ceilings of palaces were decorated with flowers expressed in various methods, and street cars adorned with artificial flowers ran throughout the city of Tokyo on occasions of auspicious Imperial events. Flowers are also one of the most important designs within Imperial culture.

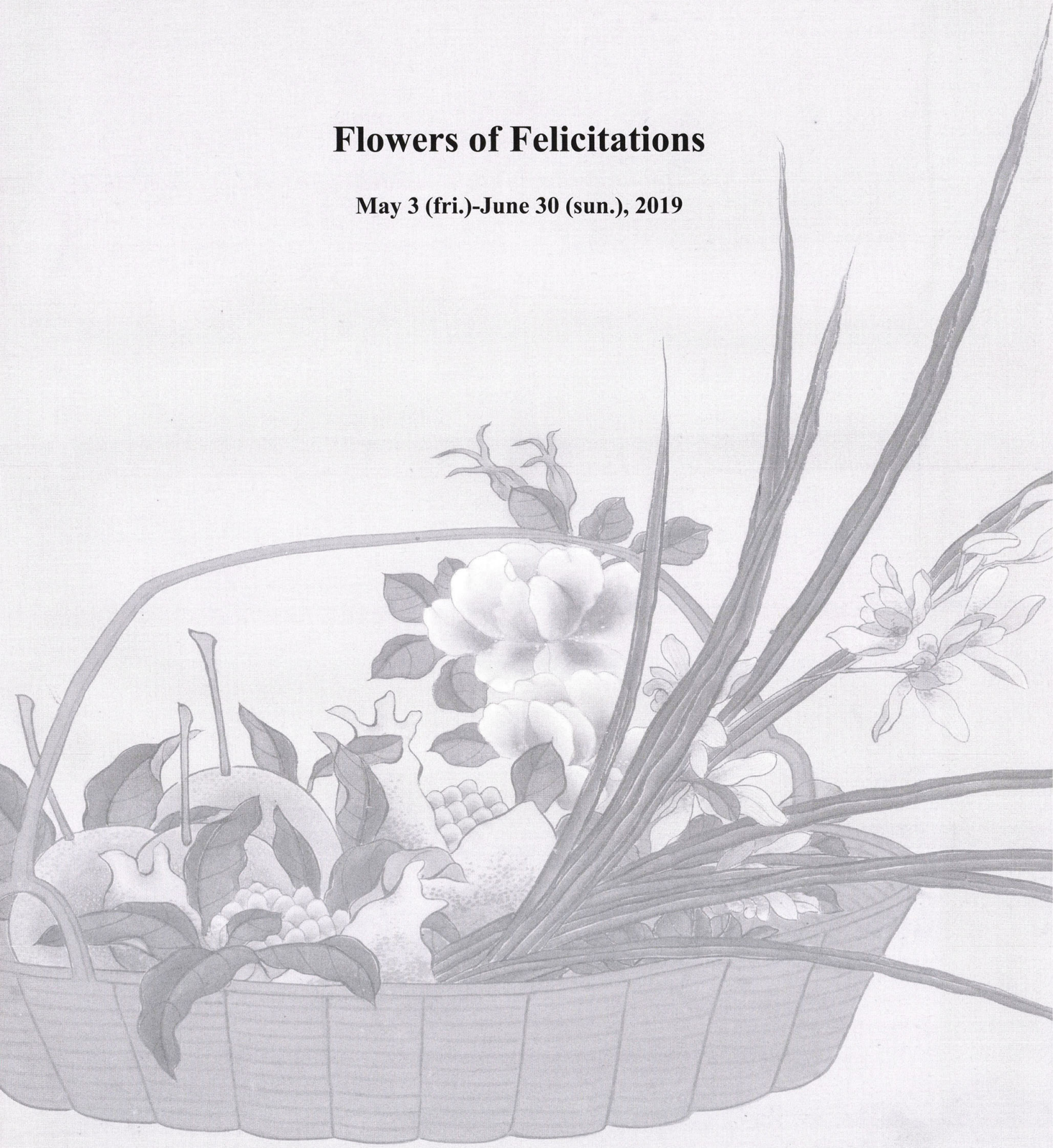
In this exhibition, we have gathered art works with flower designs among our museum's collection, which were gifts to celebrate auspicious Imperial events, or created to decorate the interiors of Imperial palaces. We hope our visitors will enjoy the sublime decorativeness and forms of these art works which adorn scenes of felicitations.

May, 2019

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

Flowers of Felicitations

May 3 (fri.)-June 30 (sun.), 2019



The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan